

 女性医師の窓

女性医師、母親医師としてのこれから

石川県立中央病院 外科
佐藤 礼子

幼い頃、ミュージカル映画のメリーポピンズとサウンドオブミュージックが大好きで口真似で歌っていた私は、小学生のとき両親に頼みこんで近所に住むアメリカ人の英会話学校に通い始めました。アルファベットもろくに言えない私がいてもお構いなしで、教室内では日本語は一切禁止。最初は??の連続でしたが、アメリカの子供たちが使うカラフルな英語教材、誕生日やクリスマスのパーティー、ゲームや歌など、はじめて実際に触れる外国の香りにすっかり魅了された私は、高校卒業までその英会話教室に通いました。

その影響もあってか外交官を目指し一旦は文系の大学に進学しましたが、在学中に様々な出会いがあり、興味は保健医療分野での国際協力へ。大学卒業後は、留学、アフリカでの2年間のボランティア活動、日本の国際協力関連機関での仕事を続けてきました。それらの経験は私にとってかけがえのないものとなりましたが、一方で、情熱に溢れて国際協力の世界に飛び込んだにも関わらず、専門性もなく、海外ボランティアといってもたかだか2年間で何もできずに去っていくことになった自分の無力さ・傲慢さを痛感しました。帰国後、これからどうすべきか悩みに悩んだ結果、意を決して27歳の時に医学部へ編入しました。今年で35歳になりますが、医師としてはまだようやく4年目、一人前にはまだまだ長い道のりです。

そんな中、学生時代の旅行中に会ったインド人と何故か結婚し、当初は1年ももつだろうか・・・と思っていた結婚生活も丸5年が経とうとしています。そして、この原稿を書いている数ヶ月後には第1子を出産予定です。これまで、留学も、アフリカ行きも、インド人との結婚も、ほぼ事後報告。30を過ぎてようやくそれなりに安定した生活ができているものの、まだまだ未熟な状態。そんな自分勝手な私を、心配しながらも「娘の決めたことなら」と全力で応援し続けてくれた両親は実はすごかったんだな・・・と、親になろうとしている今になってしみじみと感じています。今後、インド人と日本人のミックスでありイスラム教徒である私の子供が日本で生活していく上で、文化や宗教の違いなどから様々な困難が待っていると思います。医師としても未熟なのに、小さい子供を育てながらの仕事復帰はしっかりできるのか、今後のキャリアはどうするのか、ちゃんと親になれるのか・・・。(再び)悩みに悩む毎日ですが、子供が肩身の狭い思いをすることなく、のびのびと成長してくれるために私にできることは何なのか、私の「女性医師+母親医師」としての生き方を模索する毎日です。

そして、今後、おそらくそう遠くはない将来にインドに帰る日が来ることにはなりますが、インドに根ざして生活していくなかで、本当の意味での「国際協力」が待っているのかもしれませんが。医師としてはだいぶ遅いスタートに選択を後悔することもありましたが、これまでの紆余曲折やバラバラにしか見えなかった経験の一つ一つがぼんやりとつながり、ようやく目指すべき道が見えてきたような、そんな気がしています。

最後になりますが、妊娠や体調不良で十分に働くことができなかった私を、温かく見守り指導してくださった外科の先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。復帰後にしっかり恩返しすべく、まずは無事に出産を終え、今できることを精一杯頑張っていきたいと思っています。